

バーナムの森はなぜ動いたのか—
『マクベス』における移動する森の必然性

飯島 昭典

はじめに

出世という野心に絡む様々な問題、これは昔に限らず今を生きる我々にとっても身近な問題である。特に男性は組織において少しでも地位を高めようとあれこれ画策し、競争をしながら自身の出世欲を満たそうと必死になるのは、決して珍しいことではない。男性心理の特徴として、しばしば優越志向、権力志向、所有志向の3点が挙げられる事があるが、組織における出世にはこれら3点の特徴が全て関わる問題であり、男性と出世争いとはステレオタイプ化できる密接な関係と言えるのではないだろうか。

ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の『マクベス』 (Macbeth, 1605)¹ はまさにこの出世とそれに対する野心が生む悲劇を扱った作品であり、現代の我々が目にする「足を引っ張り合う」という行為が「殺し」という最悪な行為によって置き換えられたものである。荒野で出会った3人の魔女の奇妙な予言を信じ、次々と邪魔な人間を血に染めていく、作品タイトルと同じ名前を持つ主人公「マクベス」 (Macbeth) である。

四大悲劇の一つである『マクベス』に対してはそれこそ膨大な先行研究が存在しており、先行研究の系統を示すのも困難なほどである。ジョナサン・バルドー (Jonathan Baldo) は『マクベス』に触れながら、「確かに現代のシェイクスピア批評と歴史的文学研究の主な流行というのは、概して作品が作られた文化の他の分野を認め、注目してみる事を含んでいる。普遍的なものを探そうというよりはである」 (“ To be sure, the dominant trend in contemporary Shakespeare criticism and historicist literary studies generally entails learning to recognize and respect the otherness of culture in which the work was produced rather than a search for universal ”) と評している。

ヤン・フラン(Jan Frans)は最近のシェイクスピア研究と『マクベス』の関連について以下のような見解を示している。

Hypertextual reading enables us to move out of the text, into relevant contextual material, without seeing this material as part of the supposedly unified whole of the literary text. The point of hypertextual criticism is not to determine the relation of each contextual link to the whole of, say, *Macbeth*, but to follow the plural, simultaneous paths of contextual association that are set in motion at any nodal point in the play. . . .

ハイパーテキストの読みというのは我々にテキストの外に出て関連ある前後関係の材料へと入っていく事を可能にするのだ。この材料を文学のテキストのおそらくは全体を統一するものの一部としては見ない。ハイパーテキスト批評の要点は互いの前後関係の繋がりを全体へと結びついている、例えば『マクベス』全体へと結びついているとは決して考えない。そうではなく、多数で同時の前後関係の道筋を追うことであり、その前後関係は劇の中のいかなる節点においても流動的なのである……

これら二人の批評家の考え方は現代の批評の潮流である、テキストそのものよりも周辺要素に注目したものである、と言えるであろう。そして同じようにテキストの周辺である歴史に注目したキャロル・ストロンジン(Carol Strongin)は「正当な王への反抗とはシェイクスピアの同時代人には神や自然に対しての反抗とみなされていた」(" the rebellion against the

rightful king would have been viewed by Shakespeare's contemporaries as a rebellion against God and Nature ")と王権神授説を根拠に作品の解釈を行っている。²

現在のシェイクスピア批評の潮流として普遍性をテキストに求めない事や、ストロンジンのように当時の歴史的背景といった一過性の同時代性への注目は、テキストがそれだけでは成立し得ない、化合物であることを示している。文学研究はテキストのみに埋没するのではなく、あらゆる知識と関連性において成立するというのがよくわかるものである。文学の特権化を捨てあらゆる文化表象の一部としてとらえるのは望ましいことである。私はそれに反対するつもりは毛頭ない。しかし、文学研究の醍醐味は、研究することによりさらにその作品の理解が深まり、より楽しめるようになる、というものである限り、作品そのものの伝えるメッセージを読み取ることも決して無駄なことではない。私は原点に戻り、作品中心の批評方法を取るつもりである。マクベスが破滅する原因であるバーナムの森の移動はなぜ起こらねばならなかったのか、というのが本稿の問いである。本稿の問いに答えることは、作品の示す普遍性を明らかにする事であり、先にあげた批評とは違った結果を示す事になる。ここでは『マクベス』の示す普遍的メッセージを読み解くのが本稿のねらいである。

1. マクベスの二面性

作品タイトルと同じ名前マクベスとは一体どのような主人公と言えるであろうか。彼の名前が第1幕第2場で初めてあがるが、マクベスを評する一緒に戦った隊長の言葉は、彼をして武人として武人たる様子をありのままに伝えている。ノルウェイとの戦争中に裏切りにあったマクベスたちであるが、「運命などには目もくれず／太刀を振り回し／べっとり血糊がついたそれで／武勇の申

し子さながら敵陣深く切り込み／蛮族の眼前に迫った」(“ Disdaining fortune, with his brandishing steel, / Which smoke with bloody execution, / Like valour’s minion carved out his passage / Till he faced the slave— ”)(6)という働きをしている。敵や危険に恐れをなさずに戦い続ける彼の様子は、勇敢そのものである、と言えるであろう。そして、このような武人としての心構えのみならず、マクベスがスコットランドにもたらしたものは、「勝利」(“ the victory ”)(8)である、と共に戦ったロス(Ross)が伝えている。こうした味方によるマクベスへの描写は、彼を勇敢な戦士であり、味方からの信頼を得ている、そして望むべく結果をもたらす勇者とするのに適当な説明ではないだろうか。マクベスは彼の名前が挙がるこの場面で、男性らしい男性、典型的な勇者として紹介されているのである。

またこの物語の始まる前のスコットランドとノルウェーの戦いという背景、そして味方のコーダの領主の裏切りという設定も、マクベスをこうした典型的男性性を持つ勇者として登場させるのにうってつけの設定である、と言えないだろうか。つまり、肉体的強靱さと恐怖心の克服は、男性性を表す最も単純な特徴であり、それは戦闘という状況下で最も明白に表されるものなのである。そして裏切りに反するものとしてマクベスに与えられる特徴は、王ダンカン(Duncan)のために命をかけて仕える者という忠義、そしてダンカンから得られる信頼という、かつての日本の武家社会でいうところの御恩と奉公的な、武人組織の典型をなすものなのである。肉体的強靱さと恐怖心の克服、そして武人組織の美点、どちらについても我々は男性性を付して考えるのが普通ではないだろうか。マクベスは肉体的精神的強靱さと、忠誠心と信頼という武人としての美点を備えているのである。一緒に戦った兵士によるマクベスの説明と共に作品の展開前の背景も、マクベスの男性性を際立たせるのに一役買っていると言えるであろう。少なくとも読者がまず始めにマクベスに持つ印象は、典型

的武人の男性性なのである。

そして結果的にマクベスを破滅に追いやる地位への野心も彼の典型的な男性性を表している、と言えるであろう。霧の中で3人の魔女の予言に食いつくマクベスの様子をここで引用して見よう。

Stay, you imperfect speakers! Tell me more!
By Sinell's death I know I am Thane of Glamis;
But how of Cawdor? The Thane of Cawdor lives
A prosperous gentleman. And to be king
Stands not within the prospect of belief—
No more than to be Cawdor. Say from whence
You owe this strange intelligence; or why
Upon this blasted heath you stop our way
With such prophetic greetings? Speak, I charge you! (11)

待て、お前の言う事は不完全だ。もっと言え。

サイネルの死によって確かに俺はグラミスの領主だ。

だが、コーダとは何だ。コーダの領主は生きていて、

勢いも盛んな男だ。そして王になるとは、

まったく信じられない事だ。

コーダの領主ではもうはやなくなるだと。言え、どこから

お前たちはそんな奇妙な情報を持ってきた。そしてなぜ

こんな荒地で我らの歩みを止めて、

こんな予言のような祝辞を言うのだ、言え、答えろ。

何の脈絡もない降って湧いたような出世の予言に躍起になって続きを聞きだそうとするマクベスの様子が描かれている。地位への過敏な反応は、男性に特有の反応であり、この意味でもマクベスは男性的性格の典型をなしている、と言えるのである。実際にマクベスはコーダの領主の地位が手に入ると、バンクオー(Banquo)の言葉を借りるならば、「呆然として」(“ rapt ”)(14)魔女の出世の予言の実現を喜んでいるのである。「殺しというまだ考えただけに過ぎない俺の思いは／俺の平生の心の状態をこれほどぐらつかせる」(“ My thought, whose murder yet is but fantastical, / Shakes so my single state of man ”)(14)と既に地位獲得のために、「殺し」という考えが心に浮かんでいるのである。この傍白の直後にやはり傍白で、運によるものならば、手を下すまでもなく王位は舞い込んでくるに違いない、と自らの「殺し」の考えを捨てはするが、望むべく地位の実現のために普通の人間が、「殺し」を意識するだろうか。妻のてこ入れによって殺人を犯す事になる、とされるマクベスであるが、彼は自らも既に地位への尋常ならざる野心の芽をもっているのである。地位への執着は、マクベスの持つもう一つの典型的男性性なのである。

第1幕第1場は3人の魔女がこれからの計画について話しあう場面であるが、ここで3人が唯一声をそろえて述べる言葉が、この場面の最終2行である。

「きれいは汚い、汚いはきれい／霧と汚れた空を舞っていこう」(“ Fair is foul, and foul is fair. / Hover through the fog and filthy air .”)(5)。最初の1行は矛盾した2つの形容詞が並んでいる。そして次の行の(“ Hover through ”)についても「舞っていく」という意味と「～のあたりに迷う」という正反対とも取れる意味の解釈が可能である。これは作品の導入部分の最後として、また3人の魔女という登場人物が口をそろえて発言するという強調された台詞によって、読者に強い印象を与えるものである。ここ

にシェイクスピアの何らかのメッセージを読み込むのも興味深いことではないだろうか。これに留まらず主人公マクベスの発言にも上記の魔女と同じような矛盾した二つの要素を含んだものがある。第1幕第3場のマクベスの初めての登場に際して言った台詞は「こんなひどい素晴らしい日は経験した事がない」(“ So foul and fair a day I have not seen ”)(10)である。ここでも主人公の初めての登場という強い印象を与える発言で、二つの相反する形容詞を並べているシェイクスピアなのである。³つまり、この作品で矛盾した二面性というのは重要なモチーフとして考えても無理な推論ではない、と仮定されるのである。

主人公マクベスの特徴である男性性については既に述べた。しかし、彼はこれとは反対の特徴も有しているのは事実である。彼は求める地位のためにダンカンを殺す。しかし、その後、彼は自らの保身のためにバンクォーを殺し、フリーアンス(Fleance)を殺そうとし、シーワード(Seyward)の息子を殺し、マクダフ(Macduff)の妻や息子を殺しと悪行に手を染め続けるのである。刺客を使って殺害を行ったマクベスであるが、この連続した殺害の元にある感情は、実はこの暴力的特徴とは反対の精神的脆弱さがあるのである。自らの行った悪事と共にやってくる恐怖心、つまり保身に伴う恐怖心、に打ち勝つ事が出来ずに彼は殺しという悪行を続けるのである。言わば自らを律する事が出来ない、止める事の出来ない弱さである。

. . . I will tomorrow —

And betimes I will — to the Weird Sisters.

More shall they speak; for now I am bent to know

By the worst means the worst. For mine own good

All causes shall give way. I am in blood

Stepped in so far, that, should I wade no more,
Returning were as tedious as go o'er.
Strange things I have in head, that will to hand;
Which must be acted ere they may be scanned. (53)

……明日そうしよう。
いやすぐに魔女のところに行こう。
もっと魔女たちは話すに違いない。今はどうしても知りたい。
どんな最悪な手段であろうと、自分の善のためなら、
大義名分は通るのだ。私は血に手を染めている。
深く踏み込んでしまった、もう引き返せない。
引き返す事は進む事と同じようなもの。
奇妙な事が頭の中にあり、手にまで来そうだ。
それはやっつけてしまわなければならない、じっくり考えてしまう前に。

マクベスの自分を律する事が出来ない様子を描いている台詞である。そしてこの保身に伴う恐怖に負けているマクベスが頼るのは、魔女たちであり、ここでは他者への依存という自らの力による解決法ではない構図も見えている。恐怖に勝てず自らの行動を律せない、そして自らの取った行動の助力のために他者に頼る、というマクベスの見せる弱さを我々は読み解く事が可能なのである。

弱さと女性性を結びつける事は、現代に生きる我々にとってデリケートな問題であり、すぐに批判の言葉が返されても仕方がない、ステレオタイプ化であろう。しかし、マクベスの持つ男性性とは明らか対比をなすものも、彼は有しているのは事実なのである。剛勇さに対しての精神的脆弱さ、そしてさらなる地位を求める上向きベクトルの意識の流れ、保身という平行ベクトル、あるいは

は下向きベクトルの意識の流れが彼には並存しているのである。矛盾した性格を表すのに、彼の持つ男性性に対して女性性という言葉を使うのには、無理がある。しかし、彼には男性性とは反対の弱さという特徴も持っており、これは先に述べた3人の魔女やマクベス登場の際の、相反する二面性と重ね合わせられるものなのである。

2. 重ねられる現実と虚構

マクベスの性格に見られる二面性は、彼の取る行動においても同じような構図で説明できる。彼は魔女の予言に従いダンカンを殺し王となるが、ストロンジンはこのダンカン殺害と魔女の予言について以下のように述べる。魔女たちによる「それはただマクベスが王になるであろうというものであり、ダンカンに殺さねばならないというものではない」(“ it only tells Macbeth that he will be king, but that he must murder Duncan ”)。つまりストロンジンの言葉を発展させるならば、マクベスは自分の自由意志によってダンカンを殺したのであり、魔女たちの予言に自らの行動の基礎を置いているつもりになっているだけなのである。予言を根拠としながらも実は、それは彼の解釈の間違いに端を発しているのであり、自らが作り上げた予言の正当性という幻想に取り付かれているだけなのである。そもそも魔女たちによる予言の信憑性については、疑わしいものがあるのは事実である。結果的にマクベスを破滅に追い込む事になる「マクベスは倒されない／バーナムの大森林がダンシネインの丘にと／彼を相手に攻めてこない限りは」(“ Macbeth shall never vanquished be, until / Great Birnam Wood to high Dunsinane Hill / Shall come against him ”) (61) という予言に対しては、枝を持った兵士による移動の比喩として森が動く事であり、この予言の信憑性は高いと考え

られる。そしてもう一つの予言、「女の生んだ者には／マクベスを害する者はいない」(“ none of woman born / Shall harm Macbeth ”) (60)についてどうであろうか。帝王切開で生まれたマクダフであるが、果たしてマクダフの存在を女が生んだものではない、と言えるであろうか。早産によって男の手により母親の胎内から取り出されたとしても、生んだのは間違いなく母親であり、女性なのである。この予言をバーナムの森と同じように比喻として読む事は少しこじつけのように思えてしまうのである。やはり英語の意味からも、女が出産した人間の中にはマクベスを倒す者はいない、と取るのが自然である。そもそもこの予言の信憑性が疑われるのである。この前の台詞「鼻で笑ってやるのだ／人間の力など」(“ laugh to scorn / the power of man ”) (60)という魔女の発言などにも偽りは感じられるものであり、マクベスが信じた予言はそもそも信頼を置けるものではない事が明らかなのである。信頼の置けない予言に対してマクベスは自らの解釈によって信頼するという虚構を作り上げてしまったと言えるのである。そもそも魔女というこの世の者ではない存在が発した予言、悪と不幸に結びつけられる存在⁴が発した予言を自分の都合のいいように解釈したマクベスなのである。ダンカンの殺害の予言についても、バーナムの森の予言についても、女の生んだ者には自分を倒す者はいない、という予言についても、魔女という悪と不幸をもたらす存在の言葉という事を忘れて、自らの都合に合わせて勝手に解釈したのである。

予言の虚構性を信じて、地位獲得と保身、連続した殺害という現実の行動を取っていくマクベスである。自らが作り上げた予言の信憑性という幻によって彼は悪行という実際に手を染めていってしまうのである。マイケル・サエンジャー(Michael Saenger)は、こうしたマクベスの行動の特徴について「ハムレットの『彼にとってヘクバーとは……』(第2幕第2場559行)のように、舞台上の行動は、現実と虚構の正反対の極点に同時に牽引されているものであ

る」 (“ As in Hamlet’s “ What’s Hecuba to him. . . ? ” (2.2.559) the action is simultaneously drawn to opposite poles of reality and fiction ”) と述べているが、まさにマクベスは現実と虚構を重ね合わせ、それに従って自らも行動していった登場人物である、と言えるであろう。この意味でマクベスの取った行動は、性格と同じように相反するものが一緒になった様相を帯びている、二面性を特徴とするものなのである。

虚構という幻を信じてマクベスは悪行を続けるが、彼が手にするものは一体何なのであろうか。マクベスの殺しへの態度は、作品前半と後半では明らかな差が見られる。ダンカンを殺害した直後のマクベスは以下のような不安を妻に漏らす。

But let the frame of things disjoint, both the worlds suffer
Ere we will eat our meal in fear, and sleep
In the affliction of these terrible dreams
That shake us nightly; better be with the dead
Whom we, to gain our peace, have sent to peace,
Than on the torture of the mind to lie
In restless ecstasy. . . . (44-5)

そして秩序がばらばらになり、両世界は滅んでしまえ、
我々が恐怖の食事を取り、
これらの悪夢の苦しみを味わうならば。
それも夜毎の事だ。あの死者と共にいた方がいい、
自分の安らかさを守るために、安らかさに送ったあの者と。
心の拷問台に乗せられて、

こんな不安の極みをすごすよりは……

マクベスの感じている恐怖は自分も死んだ方がましである、というような一種の後悔と幾ばくかの良心の咎めを感じているものである。「心の拷問台」(“torture of mind”)とは良心を苦しめられる彼の様子を表しているのである。これらの後悔と良心の咎めは魔女の予言を信じて取った行動が、まだ彼の元々持っている人間性と関わっている事を示している。虚構を信じて殺害という実際の行動を取ったとしても、そこには彼の人間性がまだ存在しているのである。感じている恐怖がその事を証明している。

しかし、舞台の進行と共にマクベスの様子は変わっていく。マクベスは言う。「私は恐怖の味をほとんど忘れてしまった」(“I have almost forgot the taste of fears”) (84)。「私は恐怖にすっかり浸されて／恐ろしさは自分の殺しの心に慣れっこになり／一瞬たりとも私を驚かせはしない」(“I have supped full with horrors: / Direness, familiar to my slaughterous thoughts, / Cannot once start me”) (84)というように人間的感情は失われていくのである。この直後の妻の死の知らせに対しても、夫人を白痴呼ばわりして蔑んでいる様子が描かれている。マクベスの良心の咎めという罪悪感もはや残されていないのである。この段階では予言を信じるという虚構と殺しという実際の間には、彼の人間性はもはや存在しない。虚構という幻に彼は完全に支配されてしまった状態と言えるであろう。ダンカン殺害時の妻からの教唆に対してビル・デラニー(Bill Delaney)は「マクベスは殺しの教唆と段取りをつけた女に対して押さえつける道徳的手助けがあったら良かったはずである」(“Macbeth would have had the moral support of domineering woman who had instigated and orchestrated the assassination”)とマクベスの良心の欠落を述べているが、彼の道徳性の欠

落は、舞台の進行と共に、さらに露になっていってしまうのである。

彼はこの世のものではない魔女たちの予言という虚構、そしてそれに対して自らが勝手に作り上げた解釈という虚構、を基礎にして実際の行動を取っていく。そしてその結果、彼が手にしたものは人間性のさらなる欠落と道徳性の欠落である。マクベスはダンカン殺害によって自分は王となる事ができた。しかし、ダンカンの有していた「君徳」(“ virtues ”) (21)は手にする事が出来ない。バンクォーに対して怯えたのは「彼の生まれながらの気品」(“ his royalty of nature ”) (40)である。王位を備えながらも彼が手にしたのはそれに相応しくない精神的墮落なのである。この意味でも彼の持っている王位は、外見と実質の乖離が見られる虚構の存在である、と言えないであろうか。正当なものによって手にした王位ではなく、幻という現実には根ざしていないものによって手に入れたものは、やはり虚構なのである。そしてそこには彼の精神的墮落という要素が含まれるのである。

まとめ

マクベスの性格は剛勇さと脆弱さという相反する2つの面がある事を第1節で明らかにした。そして第2節では彼の取る行動においても幻に操られ、実際の行動を取っていくマクベス、虚構という幻によって得られた王位という現実には、彼のさらなる精神的墮落を伴うものである、という事を示した。マクベスの精神性と作品のテーマに関してストロンジン以下のような評を行っている。

The problem of moral order that Shakespeare has been considering in the play is not resolved, however, with the

defeat of Macbeth, for that defeat is only a mirror image of the rebellion with which the play has begun. Through the action of Macbeth Shakespeare has exploring the experience of rebellion from the rebel's point of view and has shown how Macbeth, like his predecessor as Thane of Cawdor, has come to " throw away the dearest things he owned. ". . .

作品の中でシェイクスピアが考えている道徳的秩序の問題は解決していない。しかし、マクベスの敗北があるのだ。というのもその敗北というのは作品が始まる反乱のイメージの唯一の鏡だからである。マクベスの行動を通して、シェイクスピアは反乱者の視点から反乱の経験を模索し、マクベスが彼の先駆者のコーダーの領主のように、どう「自分の持っている最も大切なものを捨てる」ようになったかを示したのである……

ストロンジンの言う「最も大切なもの」とは仕える者としての忠義であり、良心であることは言うまでもない。信頼という特徴もそれに含まれるであろう。この論文の出発点はマクベスが破滅する原因となったバーナムの森の移動の必然性を明らかにし、作品の示す普遍性を明らかにする事であった。そろそろこれに対する答えを出す時が来たようである。確かに動くはずのない森の移動というのは幻のようである。しかし、それが枝を持った兵士のたちの移動という現実になったとき、何が作品で明らかにされるであろうか。それは自らの野心と保身のために悪行を重ね続けたマクベスに純然たる現実を示すことになる。その現実とは、彼の取った行動による自らへの罰であり、復讐の対象という憎しみの的という現実である。その憎しみは森の移動によって晴らされるのであ

る。マクベスの周りは敵ばかりという孤独の状態である。憎まれながらの孤独の通じる場所は死という、罪に対しての報いでしかないのである。マクベスが孤独であるという証拠には「今や反乱の徒が刻々と彼の不義を責めたてる／自分の命じるものも命令で動くだけ／心のつながりなどまるでない」(“ Now minutely revolts upbraid his faith-breach. / Those he commands move only in command, / Nothing in love ”) (79) という説明で明らかであろう。敵ばかりか味方においてさえ、マクベスに心を寄せる者はいないのである。彼は精神的に完全に孤独の状態に陥っているのである。

マクベスは自らが信じて作り上げた虚構に従い、連続した殺害を行い悪行という実際の行動を取ってきた。幻に取りつかれて手に入れたものは、名ばかりの王位であり、それにふさわしい何の尊厳も持たない、精神的墮落であった。皮肉にも幻に従い取ってきた実際の行動の通じる場所は、自らの死であり、果たされるべき恨みが現実になり、当然の報いという結果なのである。森の移動という幻が現実になることの意味は、マクベスに対して果たされる恨みという罰が、彼の精神的孤独において実現する、というものなのである。この答えが本稿の導入で述べた普遍性を持つものであることは明らかであろう。この森の移動のイメージは岩崎 宗治が述べるように「その緑の波は、まぎれもなく春と〈平和の森〉のイメージ」(68)であり、再生を意味する望ましいものなのである。⁵ 道德性の回復と倫理という普遍性の答えがマクベスの死によって用意されるのである。

註

1. 本論文中『マクベス』からの引用は、ウィリアム・シェイクスピア『マクベス』(Macbeth)、Penguin Books, ed. George Hunter の版による。括弧内は該当ページで表す事にする。
2. 歴史的なアプローチを取る上で避けられないものには1605年11月5日に起きた火薬陰謀事件があるだろう。イングランドにおける高まっていたカトリック教徒弾圧に対して信者が企てた国会議事堂の爆破未遂事件は、『マクベス』出版と同じ年の出来事であり、陰謀や恐怖、反逆者ガイ・フォークスの処刑など、作品のイメージと重ねられる部分が多々ある。
3. この他ににも第1幕第1場で第2の魔女が発する「騒ぎが終わって／戦いが負けて勝って」(“ When the hurly-burly’s done / When the battle’s lost and won ”) (5) などの台詞についても相反する二つのイメージは表されている。
4. 魔女は様々なイメージを持つ存在であり、時と場合によって表すものは色々であるが、悪と不幸を表すものとしては、魔女による邪魔者の殺害、例えば犠牲になった者にはオルペウスやペンテウス、ゲルマンの「白い女」を邪魔する青年にいたるまで多数である。また魔女になる加入儀礼としては悪魔に1年と2ヶ月仕え、盟約には血で署名する、儀礼上の交接を行うなど悪魔という悪に関する不気味な関連性がある。また魔女は共感魔術によって人に危害を加える。例えばその人の人形を作って、それに針でさしたり、人形の服や髪に火を付けたりして、その人に危害を加える。こうした魔女の説明は、名前の通り悪と不幸をイメージさせる

のに十分である。

5. 緑をキリスト教のシンボルで説明するならば、三対神徳の一つである望徳のシンボルである。その他2つの三対神徳は赤の表す愛徳、白の表す信徳がある。岩崎の述べる森の色のイメージは、エッサイの木の株から生えた若枝であるキリストの表象、枯れた十字架から新しい命を受けた緑の木など、キリスト教のイメージにも広げて言及できる、示唆に富む指摘である。

引用・参考文献

- Baldo, Jonathan. "Of philosophers and kings: Political philosophy in Shakespeare's *Macbeth* and *King Lear*" *Shakespeare Quarterly* 54.3(Fall 2003): 333-335. *Pro-Quest*. Web. 7 Aug. 2014.
- Carol, Strongin. "Shakespeare's conception of moral order in *Macbeth*" *Renascence* 50.3/4(Spring 1998): 169-182. *Pro-Quest*. Web. 7 Aug. 2014.
- Delaney, Bill. "Shakespeare's *Macbeth*" *The Explicator* 63.1(Fall 2004): 6-9. *Pro-Quest*. Web. 7 Aug. 2014.
- Frans, Jan. "Lies like truth: Shakespeare, *Macbeth* and the cultural moment/Shakespeare's secret schemes: The study of and early modern dramatic device" *Renaissance Quarterly* 56.4(Winter 2003):1325-1327. *Pro-Quest*. Web. 7 Aug. 2014.
- Saenger, Michael. "Shakespeare's *Macbeth*" *The Explicator* 53.3(Spring 1995):133. *Pro-Quest*. Web. 7 Aug. 2014.
- Shakespeare, William. *Macbeth*, Ed. George Hunter, New York: Penguin Books, 2005.
- Sillitoe, Peter. "William Shakespeare: *Macbeth*" *The Seventeenth Century* 25.2(Oct 2010): 377-378. *Pro-Quest*. Web. 7. Aug. 2014.
- 岩崎 宗治 「『マクベス』のイメージとメッセージ—暴力と黒魔術〈平和の森〉—」、人間環境大学紀要 人間と環境1 61頁—71頁、サイニー

(ウェブ、8月7日、2014年)。

川本 真由子 「マクベスの想像力」、大阪府立大学紀要 言語と文化3、1
21頁—127頁、サイニー (ウェブ、8月7日、2014年)。

内藤 亮一 「マクダフはなぜ逃げたのか—『マクベス』における英雄的男性
像—」、富山大学教育学部紀要58、121頁—133頁、サイニー (ウ
ェブ、8月7日、2014年)。